
11 子どもの地位

イギリスに子どもづれで滞在して驚くのは、公園のレベルの高さだ。公園といっても、高い入場料を払って入る特別な施設ではなく、ふつうの街角の公園のこと。日本だと、規則で定められた最低限度の面積に、サビの浮いたすべり台と、雨のあとは水がたまって使えなくなるブランコなどが設けられていたりする。都市部の場合は、中・高校生のたまり場になり、空き缶や紙屑が散乱しているかもしれない。それでも、タダで使うのだからと、あきらめている。私の住む新興住宅地の公園は、どう見てもコスト的に最も安い遊具を選んでいるようしか思えず、遊具の選択に子どもへの愛情はあまり感じられない。もうひとつ、私がよくいく都市部の公園は、近くで冠婚葬祭があると、駐車場にされてしまい、エアコンをつけた無人の車の排気ガスが、子どもの遊び場を直撃していることもある。

イギリスの公園では、あのペンキがはげかけて、遊ぶと手や服が茶色になるという経験は、あまりできない。いろいろと工夫のこれされた、カラフルな遊具があり、遊具の下の地面には、ゴム製のマットが敷かれていて、雨が降ってもブランコの下に水がたまるといったことはない。もちろん、ゴム製のマットといっても、それほどたいしたものではなく、おそらく古タイヤを細かく切り刻んでそれをマット状に固めたりしているのだと思う。要は、細部まで、配慮が行き届いているということだ。

文化が進んでいるか遅れているかを他の社会と比較することは、ふつうはかなり難しい。進んでいるという価値の規準が、社会によって大きく違うからだ。だから、イギリスの社会と日本の社会を比較して、どちらかが確実に優れていると言い切れる部分は、そんなに多くはない。だが、この公園の違いは、疑問の余地がない。明らかに日本が遅れているとしか言いようがない。

この違いはいったい何だろうか。日本が、イギリスのような公園をつくれなほど貧しいとは思えない。一般市民の経済的水準は、むしろ日本のほうがかなり高いというのが、率直な印象だ。しかし、自分たちの家庭の支出内容をイギリスと比べてみると、決定的に違うのは、その中身だろう。高価な家具・調

度品や、ブランドものの衣服や、高額の冠婚葬祭の費用など、私たちの支出は、本当の意味で生活を豊かにすることに投じられていないことが余りにも多い。結局は、ものの考え方の違いというか、私たちの日本の家庭が、本当の豊かさをつくり出すということとは、別の論理で動かされているからのような気がする。そして、社会的な投資にも、同じことがいえる。

公園に話をもどすと、日本の公園が貧困なことには、もうひとつの原因があるように思う。それは、都市計画を担当する行政の責任ある立場の人や議員などに、子どもを公園で遊ばせた経験の豊富な人が少ないからではないだろうか。子育てという、きわめて重要な仕事を他人まかせにしている人が、行政や議会の多数を占めるといふ、このメカニズムが影響しているような気がする。国連開発計画の「人間開発報告書 1996」によると、政治経済参加度で、日本の女性の行政・管理職の割合が、カナダやアメリカに比べてかなり低いという。男社会が、子どもに十分な配慮をするという視点を欠落させることになっているのだろう。「女子供」という言葉と、貧困な公園に、一定の関係があるように思えてならない。

貧しい公園と、いたるところにある豪華なゴルフ場というこの対比が、日本の社会のある意味での貧しさを象徴しているともいえるだろう。

1996 新納泉 著作権フリー

【付記】このエッセーを記してから、4半世紀近くが経過した。一読して、「古臭いな」と思われるとすれば、それだけ事態が改善されたことになる。さて、どうお感じだろうか。